

## 特集

中期計画スローガンを  
カタチにするために

最終回 P I J

ぱれっとインターナショナル・ジャパン

ぱれっとが本格的に海外とつながったのは、「スリランカレストランぱれっと」のオープン(1991年)がきっかけです。福祉就労からの脱却を目指し、株式会社として社会の中で自立した職場を作りたい夢を実現させました。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、なぜスリランカだったのか、などの歴史を振り返りながら、ぱれっとが外国とどうかかわりを持ち広がっていったかお話ししていきます。

## ●スリランカ人との出会い

福祉作業所おかし屋ぱれっとは設立当初渋谷区から補助金を受け運営していました。新商品開発や販路拡大等売り上げアップを目指し、通所員に高い賃金を払う努力をしてきました。そしてもっと社会の中で自立した職場を作りたい、「障がいのない人や外国人も含め多様な人が融合しながら働く職場を」という夢が持ち上がり、株式会社形態で運営するレストラン構想が1989年にスタートしました。どういった業態のレストランにするか考えていた時、ぱれっと創始者である谷口奈保子氏とスリランカ人との出会いがありました。スリランカカレーを提供するレストラン出店の原点がそこにあっただけです。スリランカ人コックを現地で採用、

特集記事の最終回、ぱれっとインターナショナル・ジャパン(以下PIJ)の事業開始から現在にいたるまでの変遷をお伝えします。この世界的なコロナ禍で、海外渡航はもちろん招聘も難しい状況の中、海外との接点をどう見出すかがここ3年のPIJの課題となっています。

招聘し、本場のスリランカカレーを提供するお店が1991年恵比寿に誕生、新しい働く場の選択肢としてぱれっとのセクションが増えました。

## ●スリランカから研修スタッフ来日

スリランカとつながりができたことで、村興しや保健、幼児及び障がい児教育、農業技術振興といった現地の地域福祉振興団体「サルボダヤ」から2名のスタッフを招き、ぱれっとで研修を行ないました。外国から初の招聘プログラムを実施、レストランがオープンしてから2ヶ月後の1991年3月のことでした。生活習慣や文化の違いについては、日本での滞在期間中細かな配慮が必要でした。スリランカは暑い国なので当時3月のまだ寒い時期でもあり衣類や寝具、入浴、食事には気を遣いました。幸いにもスリランカカレーを提供するお店で食事は充足しました。

また、たまり場ぱれっとの学生ボランティアが現地にてサルボダヤの村興しに参加し、ぱれっととアジアの国々との交流研修(エクスチェンジプログラム)の先駆けとなりました。

## ●スリランカの福祉事情から

スリランカとの交流をきっかけに、翌年おかし屋ぱれっと通所員とその家族、

職員ボランティア含め総勢 20 数名でスリランカに研修を兼ねた初の海外ツアーを実施しました。主要な観光地や自然を探訪する一方、福祉施設見学で重度の方が全裸のままベッドに横たわり、真ん中に排泄用の穴が開いていた光景が非常にショッキングでした。暑い国でもあり排せつされた後、ベッドの下を水で洗い流すという支援のあり方に、昔の日本のようなあまりにも遅れた福祉の姿を目の当たりにしました。

スリランカ旅行がきっかけとなり、隔年で通所員とスタッフも含め自分たちの給料を貯めてアジアの国々に研修旅行を実施しました。訪問した国はインドネシア(1994年)・マレーシア、シンガポール(1997年)・韓国(2000年)・モンゴル(2002年)、各国の福祉団体や施設を訪問したことで、ぱれっとスタッフやたまり場ぱれっとのボランティアと現地スタッフの交換プログラムを継続していきました。アメリカやラオスを始め、JICAを通じてバングラデシュからも研修生が来日しています。現地で活動を行なう NPO ともつながり、モンゴルやケニアに物資や寄付金の支援を行なっています。15か国で2年に一度開催される『アジア知的障害会議』へのたまり場ぱれっと利用者やボランティアの参加なども含め、海外との交流が盛んに行なわれるようになりました。この会議は2015年にはスリランカで開催され、おかし屋ぱれっとの通所員と職員が現地へ赴きぱれっとでの取り組みの発表を行ないました。

#### ●PIJとしての国際支援のあり方

アジアの国々を訪問する中で現地スタッフからよく聞かされたことは、「物やお金の支援だけではなく障がいがある人の

就労のための技術やノウハウが欲しい」ということです。彼らの働く場を作るとは勿論、技術を習得し、働いてお金を稼ぐことが真の自立につながるということを考えるようになりました。そこでプロジェクトを立ち上げ、スリランカに障がい者が働くクッキー工場「スリランカ Palette」(以下 Palette) を設立することになったのです。

#### ●国際支援から方針転換

Palette はスリランカ政府に NGO 登録をしましたが公的補助金は一切受けられず、純粋に国内マーケットでの経営自立を目指す必要がありました。当時のスリランカは長年民族紛争が絶えず、都市部での自爆テロに警戒をしながらコロombo市内のスーパーに買い出しや納品を行なっていました。しかしやがて世界的にガソリンが高騰し、原材料価格も軒並み値上がり、売り上げから経費が出せる状況ではなくなっていました。日本からの資金援助もいつまでも続くわけではなく、現地の売り上げだけでの自立運営に限界を感じ、永続的な国際支援の難しさに直面しました。日本からの資金援助もまもなくなくなり、10年間事業を継続しましたが止む無く撤退することになりました。幸い現地の大手菓子メーカーが特例子会社を設立し、Palette のメンバー全員を雇用してくれたので、彼等の行き場に困ることはありませんでした。これを契機に、PIJ の主軸を現地での国際支援から現地との国際協力、交流へ移行することになりました。

#### ●新たな国際協力・交流の形

2015年にはマレーシア、ペナン島の知的障がいのある人の地域生活支援を行なう団体、ACS と交流を深めるために3名

のスタッフが出張しました。現地の先住民イバン族の暮らす雄大な自然の中で「真の豊かさとは何か」といったテーマで人とのつながりを考える研修となりました。同じ年にはラオスのアジアの障がい者活動を支援する会(ADDP)を訪れ、就労支援活動を見学、ベーカリーやレストラン、カフェや美容室といった地域に根差した形での就労支援の実態を目の当たりにしました。そのNGOは日本人が立ち上げに関わっており現地スタッフがぱれっとへの研修に訪れています。

2016年には、2年続けてマレーシアの「Syiook wasabi」という障がい者団体が、工房ぱれっととの協働企画で「WarmheARTs」(ウォームハーツ)というアートイベントを開催しました。ぱれっとからはスタッフ2名と通所員2名が出張し、現地のご家庭に1週間ホームステイをし、生活に密着した形での滞在経験となりました。おかし屋ぱれっとのクッキーづくりのデモンストレーションや工房製品の制作と展示販売会を行なうなど、障がいのある本人たちが海外デビューを果たし、仕事の経験や余暇活動などトークイベントに参加をしました。

このころから通所員が積極的に海外に出向く機会が増え、長期に家を離れての海外での生活は親や本人にとっても今までにない大きな経験となっていきました。

### ●コロナ禍でPIJの活動の見直し

2018年3月にPIJ元代表谷口と黒澤理事がケニアのモヨ・チルドレン・センター(MCC)を訪問しています。MCCではストリートチルドレンの保護と自立に尽力しています。ここでも日本人が運営の中

心を担っています。Paletteもそうでしたが、如何に現地の人たちに運営を引き継いでいくかが課題となっています。モンゴルの知的障がい児親の会(APDC)とは2019年に協働企画でぱれっとから通所員、理事、親、ボランティアなど総勢9名が訪問し、おかし屋・工房製品の実演販売を行なうなど、モンゴル各地から参加した団体と交流を持ちながら大規模な福祉シンポジウムを開催しました。APDCからは中心スタッフがぱれっとで研修を受けています。引き続き交換研修プログラムを行なう予定でしたがコロナ禍で海外との行き来が難しくなっています。

### ●これからのPIJの方向性

海外とのつながりは人と人とが行き来があってはじめて協力や交流ができるものです。しかし時代は変わって、スマートフォンがあれば、オンライン会議やLine、メッセージングといったSNSを駆使し、いつでも海外と無料で顔を合わせながら話すことができます。既に交流の仕方が変わってきています。国際協力の仕方もオンラインで工夫すればできる時代になったのかもしれない。お互いお金のかからないプログラム企画も可能です。実際にモンゴルAPDCとは、スタッフや父母との交流プログラムとしておかし屋・工房の作業現場とオンタイムで通所員の働く姿を見てもらうなど交流を図っています。PIJが海外のニーズにどう応えていくか、既にネパールからはクッキーづくりのノウハウについて相談がきています。このような協力の仕方がオンラインでも可能なのか、検討をしていく必要があるかもしれません。

(PIJ代表 相馬 宏昭)